

夏季課外発進その2

大学での学問研究には、基本的な知識と、様々な課題意識とその課題解決のための目の付け所が大きな基本になっていきます。

課題意識と目の付け所とは、簡単に言って、毎日の生活において、例えば、高校時代に通学するその道すがら、スマホや音楽媒体からのイヤホンに縛られて通学するのではなく、街の音を聞き、鳥の声を聞き、天候の変化を感じ取り、風のおいをかき取り、花や緑の葉の移り変わりをつぶさに知りえるかという情報収集能力の練習と、毎日の同じ風景の中での少しづつの移り変わりを知ることや、素朴な疑問をいかに自分の中で温めるかという訓練によって育つものではないかと考えます。

道路のゴミの多さや、そのゴミをどうすべきかという目の前にある問題への取り組みをすぐできるか、維持できるか、どうしたら組織的になるか、連携できるかという関連した様々な問いを持つことだけでも、ユーザーにどう対処するか、様々なカイゼンへの取り組み、苦情処理、世界の動きに対する先手の打ち方などなど、やがて仕事の中で目の前にあらわれる具体的な自分の仕事を解決する能力育成が、もう始まっていくと考えます。

理科の実験や、社会の時間の史跡巡りや、実地検証の部分をおろそかにすると、ことさら机上でしか物事を考えない使えない仕事人になる公算は大あります。

まさしく、ふくしまのいまの地域課題についても、実際その場所に行かないと何も見えてはきません。人の視線の高さをそろえていかないと解決できるものも解決には至りません。

学校とは、そんな経験を重ねるところなのではないでしょうか。暑ければワイシャツを脱いで、全員短パン授業を行っていたのは昔のことです。ねじり鉢巻をして、滴る汗を防いでいました。脱げないワイシャツと汗の防止には、冷房も大切です。ただし、冷房による電力消費と環境破壊への危惧は、併せて持ち続けなければなりません。

生活の知恵で、快い過ごし方が数々あった時代も経験してきました。稲穂の上を渡る涼しい風や、雪のほとんどない「いわき」という土地を生かす生かし方は、今も変わりなくあるのではないのでしょうか。

常識はすぐに非常識になり、非常識はすぐに常識になるものです。ググる（スマホでグーグルを使って検索すること）も今は常識です。辞書を繰ることも、今は非常識です。

ただし、五感もしくは第六感も含めて自分たちの感覚を使って、生きる道を探ってきたという大きな本筋は変わってはいないはずです。

誰かの言いなりになったり、誰かの後をつくことばかりしていて痛い目にあってきたことも大きな事実です。

大切なことは、自分の足でひとつずつ前に出ること、自分の頭でその方向性を考えること、自分の倫理観でその良し悪しを感じ取ることだと思えます。

生徒諸君には、この夏の間、そんな問題意識を持ちつづけながら、一日12時間の学習を続けてほしいと切に願います。ガンバろうぜ。

